

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（若手研究）

研究代表者 所属・職名 人文・社会教育学系・講師

氏 名 長谷川 佑介

研究期間 平成28年度

研究費 300,000 円

研究プロジェクトの名称	英語リーディングテストの構成概念と教育実践への応用に関する研究
研究プロジェクトの概要	本学は現職教員再教育の重点化を目指す大学であり、学校現場に密接に関連した教育研究を行うことを基本的な目標としている。まず本研究では、現職の英語科教員等との対話を通して、学校現場には定期テスト等（特に英文読解テスト）を改善するための視点や方策に関するニーズがあることを見出した。そこで文献調査を行い、英文読解テストの構成概念やテストの測定対象となるスキルについて考察し、テスト作成および検証に利用可能な新たな枠組みの試作版を開発した。現在、開発したテスト作成および検証の枠組みについて、その実用的な効果を批判的に検討している段階である。本研究の過程で得られた知見の一部は、現職教員の院生も受講している修士課程の授業にも取り入れており、本研究の実施者自身の授業改善にも役立てている。
成 果 の 概 要	本研究では、英語のリーディングは単なる文字の解読作業ではなく、語彙アクセス、統語的な解析、命題の理解、情報の体系化、状況の解釈、推論の生成といった様々な認知的処理が統合されたプロセスであるという事実に着目した。英文読解テストではどのような設問を出題するかによって測定できるスキルが異なると考えられているが、それを検証するために従来の研究で用いられてきた枠組みは主に研究者向けに開発されたものであり、学校教育現場ではやや扱いづらいものであった。その実用上の問題点として、中学校・高等学校等の定期テストに適用することを想定していないこと、具体例が少なく性質の異なる設問の見分け方が十分に説明されていないことなどが挙げられる。そこで、本研究ではこれらの問題点を解決するための新たな枠組みを作成することを試みた。 本研究で開発した枠組みには、英文読解テストの設問ひとつひとつが英文中のどの範囲の情報と対応しているかを特定する段階と、英文の情報に基づいて設問に解答する際にどのようなプロセスが要求されるかを判断する段階の2つが含まれる。この枠組みを用いて実際の英文読解テストの設問を分析したところ、テストの内容や形式のさらなる改善を図ることができた。一方、この枠組みはまだ試作版の段階であり、実用性を高めるためにはさらなる改良が必要であることも明らかになった。
研究成果の発表状況	2017年2月現在、研究成果の発表方法について検討中である。研究実施者を含めた本学教員が取り組んでいる「21世紀を生き抜くための能力+α」の向上に関する研究（思考力や実践力の育成に関する論点整理と実践提案）と本研究の実施時期が重なっているため、本研究の成果を発表する時期を遅らせている。